

式 辞

満開の桜と心地よい春風に包まれて、今日関係各位多数ご臨席の下、ここに羽衣国際大学、平成三十年度の入学式を、挙行できますことは本学にとって大きな喜びであります。

とりわけ年度初めのご多用の中、本学の入学式にご臨席賜りました竹山修身堺市長、坂口伸六高石市長をはじめ、ご来賓のみなさま方には厚く御礼申し上げますとともに、平素からの大学運営へのご支援とご理解に対しましても、この場をお借りして、心から御礼申し上げます。

また今日入学されました新入生の保護者やご家族の皆さまにおかれましては、ご子息が大学入学という晴れの日を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

新入生のみなさん、ただ今、現代社会学部 209 名、人間生活学部 121 名の入学を許可致しました。羽衣国際大学の教職員を代表して、みなさんの入学を心から歓迎致します。入学おめでとうございます。

さて、私たち羽衣国際大学は、1923 年(大正 12 年)に島村育人先生らによって設立された、羽衣高等女学校の流れをくむ大学であります。戦後、羽衣高等女学校は羽衣学園中学校・高等学校となり女子教育において大きな足跡を残して参りました。2013 年(平成 25 年)には男女共学として新たなスタートを切り現在に至っております。羽衣学園中学校、高等学校の運営母体たる学校法人羽衣学園が、1964 年(昭和 39 年)に羽衣学園短期大学を設立し、南大阪地区、泉州地区の女子高等教育を担うこととなりました。その羽衣学園短期大学を一部改組転換して、2002 年(平成 14 年)に生まれたのがこの羽衣国際大学であります。羽衣国際大学設立当初は、産業社会学部産業ビジネス学科の一学部一学科の単科大学でありましたが、現在は現代社会学部に 2 学科、人間生活学部 に 2 学科、計 2 学部 4 学科を擁する大学となりました。

羽衣学園の建学の精神は愛真教育に基づく「自由・自主・自律・個性尊重の人間教育」であります。これは島村育人先生が第 1 期生に語られた、「あなたが本校に在学なさることは本校の名誉であります」という言葉にすべて、集約されているものと思います。私もまずこの言葉を新入生の皆さんに贈りたいと思います。

さて、入学にあたり皆さんとともに、一つの言葉について考えてみたいと思います。

それは「イドラ」という言葉です。皆さんがよく知っている「アイドル」という言葉と同じ語源の言葉です。皆さんは「イドラ」という言葉の意味を知っていますか。これは「知は力なり」といったイギリスの哲学者フランシス・ベーコンの言葉で、人間がもつ偏見や先入観のことを意味しています。

一つの例を挙げて考えてみましょう。

皆さんも今年からメジャーリーグに挑戦している大谷翔平選手のことは知っているでしょう。投手と打者のいわゆる「二刀流」を、メジャーリーグでもやってみようと、今年海を渡りました。投手ではエース、打者では4番打者という夢のような活躍を実現しようと、彼は5年前、まず日本のプロ野球チームに入団しました。その当時多くの評論家は「二刀流なんて無理だ」「投手か打者か一本に絞るべきだ」、さらには「二刀流なんて、高校野球ではあるまいしプロ野球をなめているのではないか」などと言われたのです。しかし結果はどうでしょうか。大谷選手は投手としても打者としてもすぐれた成績を残し、堂々とメジャーリーグに挑戦しているではありませんか。

確かに大谷選手までは、投手と打者の両方で優れた成績を残す選手はほとんどいませんでした。それをもって投手と打者を両立させることは不可能だ、という考え方にとらわれていたのです。こうした囚われた考え方のことを、ベーコンは「イドラ」と呼んだのです。

もう一つ例をあげましょう。

将棋の世界で活躍する藤井聡太六段のことも、皆さんご存知でしょう。プロデビューから破竹の29連勝などの後、史上初めて中学生で六段に昇段しました。そしてこの2月には将棋界初の永世7冠となった羽生善治永世名人との対局に臨んだのです。中学生と永世7冠が対局する、それ自体がこれまで考えられないことだと思いますが、何とこの対局で藤井聡太六段は勝利を収めたのです。

ありえないことを実現することができる、このように秘められた力を人間はもっているのです。

この二人に共通していることは何でしょうか。それは、自分に「二刀流」ができるだろうか、自分が永世7冠に勝てるだろうか、などという消極的な考えを全くしていないことです。自分ができると思っているからやる、突き進むという、一見無謀とも見える積極性がこの二人の共通点ではないでしょうか。

このような成功例を目の当たりにしても、なお私たちの多くはつい先入観に囚われ、できることでも「できるはずがない」、「無理だ」と自ら可能性を放棄してしまいがちです。これをペーコンはイドラと呼んだわけです。特に乏しい経験や知識から、物事を判断してしまうことを、「洞窟のイドラ」と呼びました。「洞窟のイドラ」とは丁度狭い洞窟の中から見える限られた外の様子を、世界全体のように誤解してしまうことを言います。先ほどの大谷選手も、私たちの「洞窟のイドラ」の例と言えるでしょう。自分のできなかった、あるいは誰もできなかった「二刀流」は、誰もできる者などいない、と考えてしまい人が実際に持つ可能性を見失ってしまうのです。

さてこうしたことは、スポーツや将棋といった特殊な世界に限られるものではありません。私は作文が苦手だ、英語はできるようにならない、数学は見るのもいやだ、など消極的な思い込み、こだわりを持っていませんか。そうした思いはこの際「イドラ」だと思って、打破して頂きたいと思います。

スポーツ関係で言うと、皆さんの先輩で女子体操選手として、北京、ロンドンの2大会に出場した人がいます。彼女もやはり大学の学業とオリンピック出場を必ず両立させる、という積極的な考え方の持ち主でした。この入学生の中にも、2020年の東京オリンピックをめざすことができるような新入生がいます。ぜひ本学在学中に夢を実現してほしいと思います。

それでは、本学入学に際し、私から新入生の皆さんに3つのことをお願いしたいと思います。

1つは、皆さんは羽衣学園の一員である、という自覚をもって頂きたいということです。先ほどお話しした通り、本学は羽衣学園の運営する大学であり羽衣学園中学、高等学校と一体となって運営されている大学です。つまり羽衣学園中学生や高校生にとって、皆さんは、お兄さんでありお姉さんであるわけです。中学生や高校生から見て恥じることのない行動によって、その模範となる学生であってほしいのです。

2つめは、本学によって立つこの地域社会に貢献する、という志をもってほしい、ということです。私たちは皆、人の支えによって生きています。その最も身近なものが地域の社会です。地域で暮らす人たちに、その若い力をもって貢献する、そこに喜びを見出してほしいと思います。ひいてはそれが皆さんの進路を決めることに、つながっていくものと思います。

そして3つめは、先ほど述べたように、自分の夢に向かって突き進んでほしいということです。過去を変えることはできません。しかし今と将来は自分の意思で変えることができます。これまで苦手であったことや、やり残したこと、それは過去のことであって、できないというのは思い込みです。これからいくらでも変えることができます。皆さんの将来は全く新しく作りあげていくものなのです。そういう気持ちをもって、今日からの大学生としての日々をおくってほしいと思います。

羽衣の「羽」は「飛躍の羽」、「成長の羽」、そして「挑戦の羽」であってほしいのです。

本学入学が皆さんの人生をより豊かにし、大きな成長へと結びつくことを願って、入学式の式辞いたします。

平成30年4月1日

羽衣国際大学学長 吉村宗隆